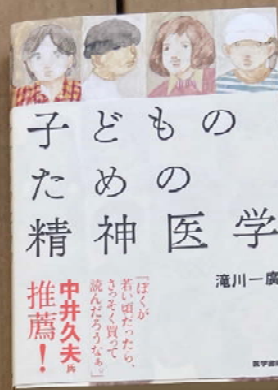
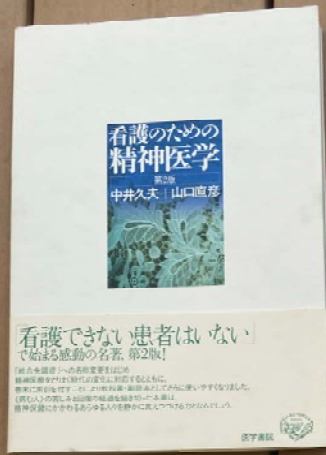
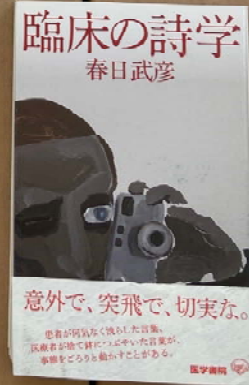
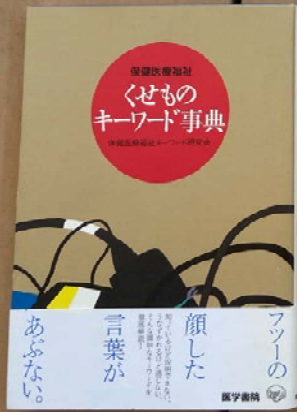
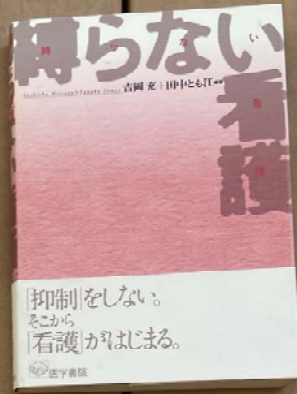


シリーズ ケアをひらく

雑誌 精神看護



# 発見はどこにあるのか？

——大いなる現状肯定と、問題に外に出ること

白石正明(医学書院)

制度と人は分けて考える。

- 「制度、システム」はどんどん変える。
- 「人」は変えない。  
⇒ 安心・保証・承認があると、人は自ずと変わる。

## 能動態は副作用が強すぎる。

- つなげると、つながらない。  
⇒(受動的になってしまう)
- 気づいたら、つながっていた。  
⇒(行為の座になること、中動態)  
⇒(過去形でしか語れない、プランできない)

## 新聞記者と話していて

- 「白石さんの本は、みんな自己啓発本の反対ですね」  
  
⇒成長とか言わない。  
⇒大いなる現状肯定。



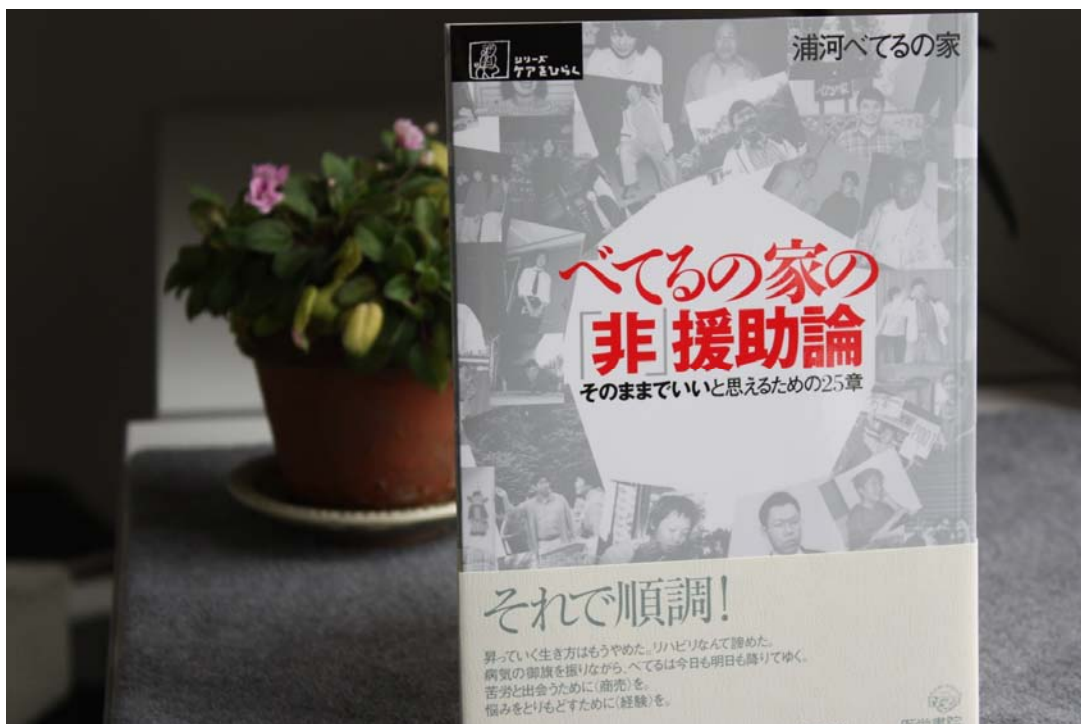
## 目次

- 1 徹底した現状肯定が革命を起こす。
- 2 答えはいつも外にある。
- 3 「普通」はいつも語れない。
- 4 一方的な贈与、一方的な信。

# 1

徹底した現状肯定が  
革命を起こす。

## 『べてるの家の「非」援助論』



# 症状をコミュニケーションのツールにしてしまう。

- 「幻覚妄想」があるから、コミュニケーションができない。⇒幻覚妄想を消す。
- ところが、お互いの「幻覚妄想」を語り合い、笑い合っている。  
⇒当の「消すべき症状」を素材にして、コミュニケーションが成立しているという不思議。

## 現状否定を内在させた言葉たち

- 「治す」「直す」「良くする」「成長させる」という“良い言葉”たちは、要するに「今のままではダメだ」と言っている。
- その視線が、逆に当人の力を奪っているのではないか？

# 改変モデルから 商人(承認／証人)モデルへ

- インドの紅茶をイギリスに持ってくるようなもの。
- 紅茶自体には変更を加えないまま、それが尊重される世界へ移動する。

## 商人モデル(現状肯定モデル)から考える (1)

### ★包摂型社会

- 「包摂」では、自分たちのほうに引っ張って行くことしか表現できない。
- 例えば発達障害の人に見えている世界の解像度の高さに、自分たちが「惹かれてしまう」という側面が見えなくなってしまう。



## 商人モデル(現状肯定モデル)から考える (2)

### ★当事者性

- 第1の当事者性  
=権利主体としての「当事者性」。
- 第2の当事者性  
=もうひとつの世界を享受する人としての「当事者性」。  
⇒治すべき世界ではなく、誘惑される世界。

## 商人モデル(現状肯定モデル)から考える (3)

### ★当事者研究

- 当事者研究によって、「もうひとつの世界」を、  
高い解像度で知ることになった。

⇒Recovery is Discovery



- それを知ることによって「こちらの世界」も見えてくる。

⇒ Recovery is Discovery

# 2

答えはいつも外にある。

では、べてるは  
「反精神医学」なのか

- 精神医学は、「対立するに足るほどの存在」か？
- 逆に、対立することによって、当の精神医学の価値を高めてしまうのではないか？

精神医学の枠組みそのものから逃れる。



「非」

「反」援助論  
ではなく  
「非」援助論

「援助する／しない」の  
枠組みそのものから離れる。

食事のこと、恋愛のこと、生活のこと……

⇒「治す／治さない」の軸の**外**に  
大事なことはある。

二項対立の**外**へ

「あれかこれか」の世界の外に

**「解」＝「快」**

はある。

# 少数派が生きる道

- 前提自体を変えなければ生きられない。
- 「問題を出されて答える」のではなく、問題設定を変える。

## 3

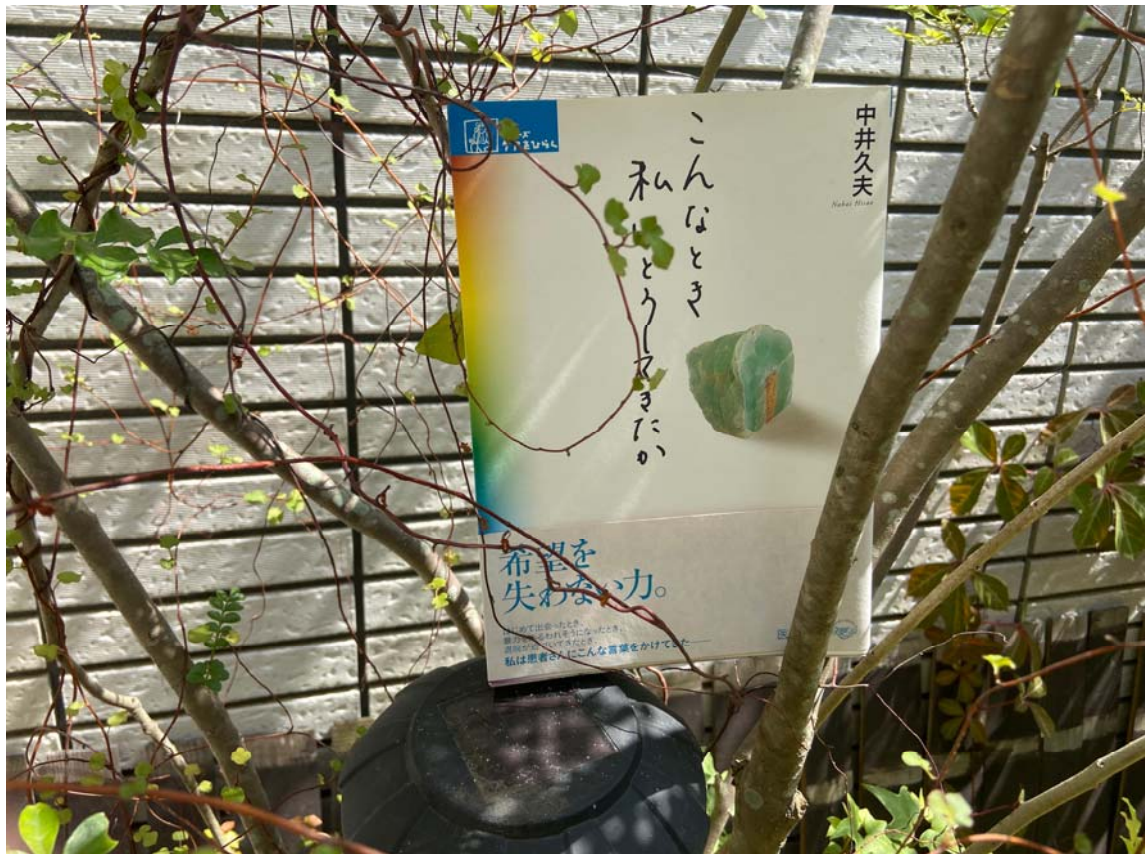
「普通」はいつも語れない。

# 「平和はうまく語れない」

(精神科医・中井久夫氏の言葉)



＝言語は、「当たり前から逸脱」しか語れない。



→キュア：特殊な行為は言語化しやすい。

→ケア：普通を支える行為は言語化しにくい。

★ケアを語るとは、語り得ない平和を語ること。

「普通」をいかに語るか



逸脱のほうから「当たり前」を語ることはできる？



# 『リハビリの夜』



## 敗北の官能

- 失禁したとき世界が遠くなる p216

失禁した私から見える世界は、その多くが、私とは関わりをもたずに動く映画のようだ。

街ゆく通行人、楽しげな街角、忙しい喧噪は、私から遠く、スクリーンを隔てた一枚向こう側に見える。

そのかわり、これまではあまりに当たり前すぎて協応構造でつながっていたことすら無自覚だった地面や空気や太陽は、くっきりとまぶしくその姿をあらわし私の体はそちらへと開かれていく。

彼らは失禁しようがしまいが、相変わらず、私を下から支え、息をすることを許し、上から照らす。

## 地面、空気、太陽の発見

- 一方的に、圧倒的に、先に**贈与**されてしまっている。
- 地面、空気、太陽に**ケア**されている実感を、共有できる体験と文章。

# 4

一方的な贈与、一方的な信。

## ケアのイメージ(熊本県・通潤橋)

- 坂口恭平の地元、熊本にある通潤橋。
- 毎週土日12時から無意味な放水。
- 圧倒的な豊かさの享受。



## 「挨拶」における一方的贈与

- 先に無償の贈与を提供する構造。

⇒「挨拶され返されないリスク」を負って先に挨拶をする。

# 「信」における一方的贈与

## 東大生の質問

べてるの家が東大で講演したときに、

「信じると言っても、信じられる根拠がないときにはどうするんですか？」

と質問された。

(信じるなんてキレイごとじゃないか?)

## 東大生の質問

べてるの家が東大で講演したときに、

「信じると言っても、信じられる証拠がないときにはどうするんですか？」

と質問された。

(信じるなんてキレイごとじゃないか?)

## 向谷地さんの答え

パンフレット「べてるに学ぶ《おりていく》生き方」p59より

皆さんの「信じる」「尊重する」と少し違うのは、私たちはそれをきまじめに使っていないということです。

大切なのは、**やけくそで信じる**とか、**口先だけで尊重**することです。「言ってしまえば勝ち」というラフな感覚で。誰のポケットにでも入っていて、ハイとすぐに渡せるくらいのほうがいい。

あまり美しい物語にしないというのが、浦河の伝統なんですね。ぜひ試してみてください（笑）。

### 「信」を個人に内属させない。

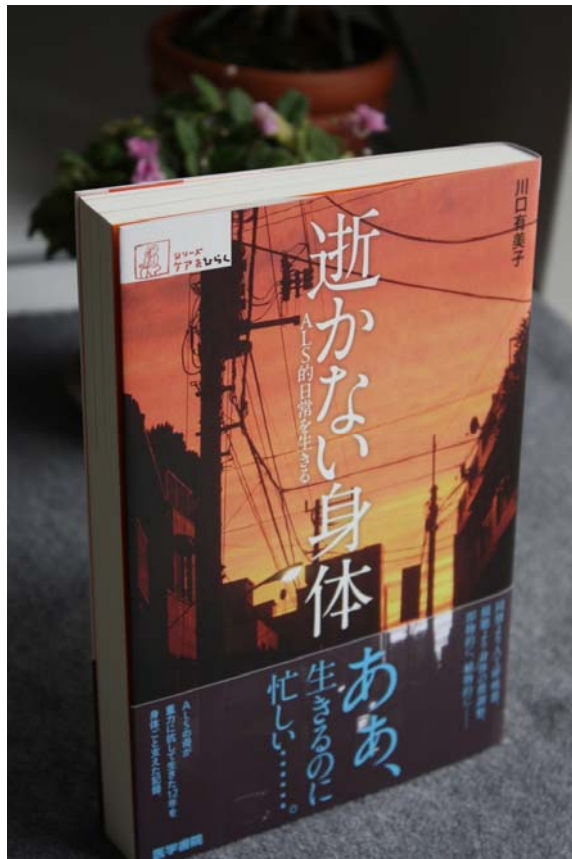
- その人の内心の問題として「信じるか／信じないか」という問題設定ではない。
- 信じるという行為を、他者との相互作用にひらき、そこで「信」という行為が実現されていけばよい。
- そのために、まずは自分から「軽く」信じてしまう。それだけで「信」は回っていく。

- 結果としての信、行為としての信。

ケアとは、余裕のある側が、  
先にちよつと贈与することではないか？

(以下不使用?)

## 『逝かない身体』



2010年4月  
大宅壮一ノンフィクション賞



# 植物的な生を肯定する

||

「現状肯定」を突きつめてみる。

⇒生きているというそのことだけで、生を肯定する道筋はあるか。

・「蘭の花を育てるように」p200

患者を一方的に哀れむのをやめて、ただ一緒にいられることを尊び、その魂の器である身体を温室に見立てて、**蘭の花を育てるように大事に守ればよいのである。**

# 受動的な生、 何かを享けることの生

- (1) 身体が動かなくなっても、何かの形で情報を拾おうとする。→文字盤、まばたき
- (2) もっと進むと、さらに微細なサインを読み取ろうとする。→「目が合う」「きっと何かを訴えている」etc.
- (3) 最後はコミュニケーションを諦め、身体サインを拾い、「勝手に」意味づけする日々。



それでいいじゃないか。

## 拾う人、聞く人、受ける人

- 「発信者がある意図を持って発したサイン」を読み取るのではない。
- 「それを拾い、意味づける人」がいて、単なる心臓の鼓動は、初めて意味あるサインとして立ち上がってくる。

# 問われているのは

- 当人の能力なんかじゃなくて、その人をどう見るかという視線そのもの。
- 「変える」としたら当人ではなく、当人をどう見るかという視線。

⇒気づいたら読者の視線が変わっていたというような本を作りたい。

## 言語の不首尾①

- 言語システムは、〈現実〉の時間の流れを捕捉できない。  
⇒因果関係がだいたい逆になっている。

## 言語の不首尾②

- 言語は「特殊」なことしか表現できない。どうしても二項対立的になる。
- しょせん「あれかこれか」しか語れない。



「あれもこれもある」現実のほうがエライ

## 商人(承認／証人) としての援助者

- そのものの自体に改変を加えない、しかし気づくと周りとの関係がいつのまにか変わっている、というのが支援者の基本スタンスなのかも。



ケンシロウ@北斗の拳

- 「契約」とか「交換」とか、**けちくさいのはダメ**。
- 一方で、それらを全て「**愛**」の一言で言い終えてしまうのもダメ。